

地質ニュース

昭和 50 年 11 月

第 255 号

1975

解 説	南関東の地殻変動④ —1974年の三原山火孔底の最近の上昇—	木村政昭・1 関東圏地震予知調査グループ
トピックス	新小型海底試錐機 マリンドリルMD300PTの開発と海上実験	木野山上鹿庄 下寺山 泰公修英春 正児司二郎潤・10
国際会議	第2回破壊力学と地震源機構に関するペンローズ会議に出席して	小出 仁・19
	「群島の基盤の褶曲について」付図3葉並に そのアブストラクトと正誤表	別所文吉・26
	蓼科山 TATESHINAYAMA	33
	南極—国際共同研究その後 —1974—75 ドライバレー掘さく計画 (DVPD) —	倉 沢 一・34
資 料	鉱物資源としての海水	岸本文男・50
	地学と切手	P. Q.・55

編集 地質調査所

表紙の写真

礫性礫岩と貝化石

観光地で知られる房総半島は鋸山の南麓に千畑礫岩層とよばれる厚さ数10mの薄い礫岩が中新世後期の厚い地層のなかにはさまっている。この礫岩は斜層理が発達し、淘汰がよく部分的に石灰質である。礫はよく円磨された硬いものが多い。生物遺骸に富みおもに *Chlamys* (カミオニシキ属) や *Glycymeris* (タマキガイ属) などの貝化石のほかウニやコケムシも多い。このような礫岩は海底の高まりで潮や波の影響の強いところに堆積したものと考えられ礫性礫岩とよばれる。写真の標本は千畑礫岩層から産したヤゲンオオハネガイ *Acesta yagenensis* (OTUKA) で現棲のミノガイ科のオオハネガイに近く中新世から鮮新世にかけて生存した大型の二枚貝である。ヤゲンオオハネガイは地質調査所の大山桂博士の話によればある程度の深さのある潮通のよいところに棲んでいた貝であり千畑礫岩層の堆積環境をよく表わしている。

(文 垣見俊弘 写真 正井義郎) 倍率 ×約 $\frac{1}{2}$

発行 株式会社 実業公報社